

ビルマの新聞

浜田 哲也

1988年は龍年であり、今年は政治の上でもあるいは社会の上でも何か変動が起こるのではないかと、香港で発行されている英字週刊誌 Asia-week は年頭の号で香港や台湾の名高い易者達に今年の世界情勢を占ってもらい、その結果をかなり大きく載せていた。占いの詳細は憶えていないが今年は確かに世界各地でいつもと違う色々なことが起こった。

日本のプロ野球セ・リーグ、中日ドラゴンズの優勝は愛敬としても、国内では天皇がこの原稿を書いている段階で重体の床についている。アメリカでは大統領選挙戦が最終段階を迎えようとしている。そして目を東南アジアに転じればタイでは首相が交替し、ビルマでは26年間の長きにわたり、政治を牛耳って来た社会主義計画党が表向きは解散した。4月のビルマ暦新年の水掛け祭りを二回やることで、日本流に言えば厄落としをし、運勢を変えようとしたネ・ウインの目論見はうまくいかなかったようである。ただ彼自身は未だに権力の実権を握っていて予断は許されない状況だが、それにしても今年の夏、毎日のように日本の新聞やテレビを賑わせたあの沸騰は本当に信じられないような出来事だった。

従来、ビルマでは新聞や雑誌は厳しい政府の統制のもとにおかれていた。テレビやラジオはもちろん国営の一局しかない。新聞にしてもビルマ語紙は四紙、英字紙は二紙発行されていたが、その内容はいずれも似たりよったりだった。大きさはタブロイド版で8頁、朝刊のみである。あたかもソビエト、クレムリン内部での権力闘争や序列が

赤の広場でのソビエト共産党首脳の並び方で推し量られるのと同様、政府や党の大きな会議があると一面に載る写真の人物とその大きさは計画党内部での序列を忠実に反映していた。そしてそれはまるで未来永劫変わることはないのではないかとと思われるほど常に同じだった。

私がビルマに滞在していたのは1983年の10月から二年間だが、その間国内政治は表向きは安定していた。国内のニュースが新聞に載るときは、常にどこそこで会議があり、誰々が出席した……ということのみが報道される。内容やその分析、紹介の記事は一切無い。国際ニュースは外国の通信社の記事の丸写しである。特派員は一人もいないからだ。そして掲載する外電の取捨選択には政権の思惑がかなり強く反映されている。例えば隣国バングラデシュの洪水のニュースなどはやけに詳しく、報道されたりするが、これはビルマはまだましなんだ、もっとひどい国もあるということをも民衆に信じさせようとする一種の情報操作であるに違いなかった。

私の知人のビルマ人などは新聞はニュースを知るために読むものではなく、誰が死んだか、また婚約・結婚したかを知るためのものだと言っていた。通常、七面には死亡や結婚また出産などの広告記事が数多く掲載されている。其の中には離婚したあるいは息子や娘を勘当したので今後一切関係ないことを承知されたいなどという広告もある。

インドの新聞に掲載された結婚相手募集の広告を分析することで社会の一側面を見ようとした東

洋史の辛島 昇教授夫妻の研究などが思い起こされるが、統制された記事よりもこのような広告は確かに社会の或る部分を垣間見せてくれるものであろう。

9月19日に国軍が権力を掌握してから、民衆の自由な活動はかなり制限されている。そして私がラングーンの人々に電話で聞いたところでは新聞は休刊が相次ぎ、一週間に一回ぐらいしか発行されていないという。しかし其れ以前にはこれまで統制されていた新聞の発行が認められ、一時は夕刊紙も含め、30紙ほどが発行されていた。今たまたま私の手元にはその今年の夏以降、新たに民衆によって発行された新聞がいくつかあるが、ここでそのうちの二つを簡単に紹介してみよう。

一つは9月4日付けのピードゥーアミン（直訳すれば人民が見ることの意）である。四頁構成でウー・ヌー元首相やアウンジー元准将の不鮮明な写真と彼らの意見、そして全国で展開されている民衆の運動の様子などが詳しく紹介されている。外国からの記事としてはアメリカにいるビルマ人達（Friend of Burma Association）が現在の運動に賛意を表するとともに負傷した人たちのために医薬品を送ることになったというニュースが目を引く。

しかし最も注目すべきは元ラングーン大学英語科の教官で英字紙 Working People's Daily の編集長だったウー・キン・マウン・ラツがマウン・マウン大統領（当時）に宛てた手紙という形を借りた論説であろう。この大統領への手紙という形式は次に取り上げる新聞ドウキッ（我らの時代）にも共通してあるものだが、大統領をウーという敬称ではなくコウというそれよりもやや軽い従って親しみのある呼び方で呼びかけることで始まっている。1966年から1967年当時の彼らの共通の思い出から始めて、マウン・マウン氏は学識経験者として一党制が良いものだと思っているはずはないし、これを子孫にまで残したいとは思っていないはずだ。自分が前に英字紙の編集長をやっていた時（1964年から1968年）は英領時代の御用新聞のようではなく、自由な意見や正確な事実を報道することをその使命としてやってきた。しかし次第にそれができなくなってしまい今日に

至った。この事態を変えることが出来るのはマウン・マウンさん、あなたしか居ない。……というような内容である。文面からも察せらるるようこの論説の筆者は大統領（当時）と同世代の知識人であり、かつての同志にまだ期待を寄せているんだという気持ちが伝わって来る。

もう一つの新聞ドウキッ（9月7日付）は新聞の題字の部分が赤色で印刷されている。こちらのほうは八頁構成だが度胆をぬくのは一面にでかかとのっている生首の写真（全部で五人）である。記事を読むと、要するに南オッカラパ地区で当局の犬となって騒乱行為を行い、自警団によって見せしめのために殺されたということらしい。この新聞には他にもポスターの写真など色々な写真が掲載されているが、六面には「飢えの為にラングーン中央駅で犬の肉を料理する人たち」というキャプション付きの写真があって実に凄惨である。

イギリスのB.B.Cがビルマ向けにビルマ語で放送しているニュース（因に日本のNHKも国際放送でビルマ向けの短波放送を行っているが、出力が小さいせいもあるのか聴取は困難で殆どその存在は知られていない）はかなりのビルマ人が信頼できるものとして聞いているが、そのB.B.Cニュース（9月6日）も六面を飾っている。ビルマ人がビルマ国内でのニュースをイギリス経由で知るというのも考えてみれば妙なことだが、しかしこれが現実である。国営放送は政権の広報になるようなことしか流さない。私が居たときは、Time や Newsweek は定期講読することができたが、検閲の為に実際に手元に届くのは常に一週間は遅れた。更に万一、ビルマ関連の記事が載っているとその号は廃棄処分になってしまう。そういうわけで情報がないビルマは東欧圏などと同様、噂の社会であった。噂を通じて人々は自らの行動を決め、また相互監視を行っているのである。そのことは例えばこの新聞の一つのベタ記事からも窺える。それによると「B.P.I. (製薬公社) から毒蛇が持ち出されたというニュースは間違いであることが判明した。」とある。何者か、恐らく政府当局が騒乱状態を引き起こすために毒蛇を放したという噂が市民のまわりを駆けめぐっていたからこそ、このようなそれを否定する記事が出

て来るのである。

さてこのドウキッ（我らの時代）紙にも作家ドー・キン・ミョウ・チッからマウン・マウン大統領に宛てた手紙という形の論説がある。彼女は先述のウー・キン・マウン・ラッと同世代の人物である。彼女はマウン・マウンは自分の弟のように思っているのであり、大統領閣下などという呼びかけでは言いたいことが言えないということから始めて昨夜のマウン・マウンの演説を聞いたが、がっかりした。法律を遵守せよというのは正論だが、その法律を制定した人たちを選んだ選挙が果たして公正・公平なものといえるのかと論を進める。警察国家の中で生を受けて育った哀れむべき若者達に銃を向けるようなことが果たして正当なことと言えるのだろうかというのである。マウン・

マウン大統領（当時）がこのような新聞に目を通すとは考えられないが、しかしこういう手紙という形式での訴えは私のような局外者の胸にも迫るものがある。

かってビルマは東南アジアで最も発達した国だった。学問的にもランゲーン大学には Hall や Luce といった超一流の学者がいたし、今はもうないが Burma Research Societyの活動は極めて活発で高い水準にあった。その栄光の日々を思い起こすとき、現在の状況は本当に見るに忍びないものがある。一日も早く、ビルマがこのようなどん底から抜け出すことを祈らずにはられない。

(1988・10)